法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

キャリア支援を考える 8 ： 美術と生活・職業のデザイン

著者	川喜多 喬
出版者	教育新聞社
雑誌名	教育新聞
号	2570
ページ	3-3
発行年	2005-09
URL	http://hdl.handle.net/10114/8752

Hosei University Repository

キャリア支援を考える --8

美術と生活・職業のデザイン

法政大学キャリアデザイン学部教授　川喜多　喬

法政大学にキャリアデザイン学部をつくった時、いくつもの誤解と攻撃を受けた。誤解の一つはアーチスト、デザイナー志望の高校生を入れたいというもの。しかし「世の中は誤解によってのみ動いている」（ボードレール）のかもしれない。誤解はときに生産的である。美術の世界のデザインと、生活、職業のデザインとどこが違うのか。私が深く考え込むきっかけになったのが、このありがたい世間の誤解であった。

デザインという言葉はsignum（印）を語幹とするラテン語からイタリア語、フランス語、さらに17世紀に英語へ。当初は計画とか規定の意で、17世紀半ばからあるものの外観・機能を示す図絵の意になった。素描、下絵という意味が出るのは比較的新しい。素描、下絵なしにいきなり傑作を書ける天才的アーチストは例外だろう。いや、高い評価を受けるアーチストですらデッサンには力を入れるのが普通。そしてデッサンは最終作品と違い、何枚も何十枚も棄ててまた描かれるのが普通である。

キャリアのデザインも何枚も何十枚も書かれてよいのである。人生のデッサンを描きながら書きかえながら生きていくのが人生で、ある時、「キャリアデザインブック」だの「キャリアデザインノート」だのに講師の指導で数時間で書きこんだものを「計画」に見立てて動かさないようなものがキャリアデザインではなかろう。

建物にも設計書や仮設の足場が必要だ。学問における仮設のようなものである。「仮説は建築の前にくみあげられる足場である。建物ができあがったら取りはらうのだ。足場は作業者にとってなくてはならぬものだが、足場を建物と思いこんではならない」とゲーテは言っている（箴言と省察）。キャリアデザインを教室の机上で描くのはキャリアデザインにとってすら一道具にすぎぬ。そのデザインに魅惑されてしまい、そのデザインをとっかかりにしてつくりあげるべき人生がもつ宏大な世界をなめてかかるとしたら本末転倒。企業家がビジネスプランやビジネスモデルに夢中になって実際の事業活動をなめてかかるようなものだ。

キャリアの目標をまず細部まで明確に定めよ（大学1年生程度の知識で？）、それなしには何も始まらないという議論に私が首をかしげるゆえんである。

某大学のキャリアデザイン論で講師が夢を大切にしろ、夢は必ずかなう、夢を目標に計画を書けと説教していた。夢はなるほど大切だが、夢は必ずしもかなわない。コンピュータアニメの世界の夢のような生き方に倣って目標を立て、それに魅入られると「引きこもり」になるかもしれない。夢を現実の試練にかけ、修正し、時には棄てる、この賽の河原の人生を教えることが、いまや私のように現実にしらけた凡俗の教員の仕事になった。

夢をもつなというのではない。誤解があるから恋愛があり、結婚があり、少子化が防げる。世は矛盾しているのである。矛盾に耐える力が「生きる力」なのである。

<AN10113317>「教育新聞―The educational news」No.2570/pp3/2005.9.29